



JAWS レポート 64

Japan Animal Welfare Society

発行人：山下真一郎
編集人：桜井邦広
// 山口千津子
編集協力：平山企画舎



発行 / 社団法人日本動物福祉協会 〒141-0031 東京都品川区西五反田8-1-8 中村屋ビル内 TEL(03)5740-8856 販(03)5496-0930 http://www.jaws.or.jp

主催：動物愛護週間中央行事実行委員会



平成22年度動物愛護週間中央行事—動物愛護シンポジウム

ふやさないのも愛～繁殖制限を考える～

動物愛護シンポジウム「ふやさないのも愛～繁殖制限を考える～」が、2010年9月12日東京国立博物館平成館講堂で開催されました。基調講演及びコーディネーターにヤマザキ大学准教授小方宗次氏、パネリストとして加隈良枝氏、高木優治氏、林典子氏を迎え、専門分野からのお話を聞いた後、意見交換がなされました。各講演者の講演要約をご紹介します。

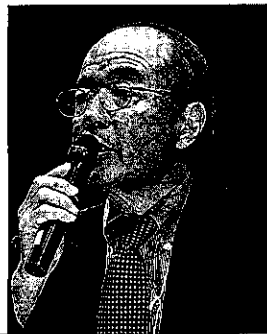
←写真左から、手話通訳者、小方先生、加隈先生、高木先生、林先生

64号 主な内容

動物愛護シンポジウム要旨	1
視察報告	2
環境省「小委員会」の立ち上げ	3
セミナー案内(シエルターにおける獣医学的管理と行動学)	3
作文コンテスト結果概要	4
CCクロクダより	4
作文「環境大臣賞」紹介	5
捨て犬・捨て猫防止キャンペーン中間報告	5
理事会レポート／ほか案内	6
「動物との共生を考える連絡会」お知らせ	6
寄付者ご芳名／事務局から	7
ジョーズジュニアコーナー	8

次号は4月発行予定です。

◆ 基調講演



● 小方宗次氏
学校法人ヤマザキ学園
ヤマザキ学園大学 准教授
動物看護学部 動物看護学科
図書館長

◆ 基調講演
今、人間も含めて地球上の生物は辛い立場にあると思います。動物のいる社会に人間の臭いが強すぎて、動物たちも困っているのではないのでしょうか。生物との共存のためには、我々人間はどうすればいいのかという大きな課題を課せられた時期になっていると思います。今年10月には生物多様性の会議がありますが、この会議の内容をみますと、総合的には今減っているものを正常な状況にという考え方が多いと思います。一方、私たちの周りには増えることに対して考えなければならない課題があります。飼い主のいない犬猫が増えることで、排泄や臭いなどの弊害があります。例えば、隣の家が集まってくる猫のノミが原因でアレルギーが出てしまった家族がいます。これは、人間のお医者さまだけでは解決できず、獣医さんや行政の方にも相談しなければなりません。1つの事でも、みんなが知恵を絞って協力しなくてはならない時になってきたと思います。

また、現代は病気が蔓延しやすい時代です。動物たちが人間のテリトリーで生活していると、どうしてもあちこちに建物ができたり、道路ができたりと動物のテリトリー範囲がどんどん狭くなっています。これは、繁殖・生態系にも影響を及ぼすことになります。

手術の利点は何かと言いますと、望まない妊娠を防ぎ捨て猫が減っていくことが期待できる、発情兆候に対して近所からの苦情が減る、また子宮や卵巣の病気が防げる、といったことがあげられます。逆に心配なことは、太ってしまったということがあります。ホルモンのアンバランスが起きるのだと思います。おなかの毛が抜けてしまう、といった事も同じ原因かも知れません。但し、ホルモンの研究は非常に難しいので、まだまだ宿題が多いのが現状です。

さて、動物を増やさないために、あるいは周りに迷惑をかけるために、私たちは今どうすればよいのでしょうか。まず、不適切な餌やりを止めるということですが、どういう方法でやれば良いか、知恵をしぼらなければなりません。そして、不妊手術の実施。また、動物の生理・習性をきちんと知っておくこと



● 加隈良枝氏
帝京科学大学 生命環境学部
アニマルサイエンス学科講師
博士(農学)

猫の生態にもとづく 飼い方のすすめ

も大切です。動物にとって良い環境とは何だろう、と常に考えることは必要です。
地域猫の問題で大切なのは、コミュニケーションです。データを見ますと、動物好きな人15%、動物大嫌いな人15%で、それ以外である人の人数が一番多いわけです。ですから、その人の立場を考えながら色々と策を講じることが必要だと思います。
近年、動物に関して色々問題が起こる原因の一つとして、人と動物の距離が近くなっていることがあります。太古の時代には、人と動物は非常に遠い位置に存在し、自然界の縄張りやルールがありました。したがって今の時代は、動物だけの勉強をしていけばいいのではなく、その動物の住む環境の勉強、そしてもう一つはそこに携わる人たちの勉強も必要だということです。人には、動物を人間社会に引き入れた事に対する責任と義務が生じます。

私たちは犬や猫を飼うとき一緒に楽しく暮らしたいと思っ

くないと思ってしまう場合があります。これでは、お互いが不幸になります。双方で理解できればいいのですが、動物に対して人間を理解して下さいというのはとても難しいので、少なくとも私たちが犬や猫の事を理解するという事は大事です。今回は、猫の歴史と生態、飼育の3原則としてトレーニングについてお話しします。

ネコ目ネコ科ネコ属のうち家畜化されているのがイエネコ、いわゆる私たちの身近にいる猫です。猫がなぜ人間の近くにいるようになったかという点、人間が農耕生活になり人間のいるところにはネズミも沢山いたこと、また人間の居住地が安全で、しかもかわいいう仕草をしているとごはんをもらえるということ関係ができたようです。かわいらしい仕草や見た目は、野生動物と異なるネコ目ネコ科ネコ属に見られる特徴です。しかし、人間と猫は、見ている世界や感じている世界が違うと

いう事は、はっきり理解しておくことが必要です。

猫はもともと夜行性の傾向がありますから、嗅覚、聴覚が優れていて視覚は程々です。単独性ではあります。ネコ科の動物の中ではめずらしく集団をつくる社会性が発達しています。その地域に餌が確保されれば、多くの個体が住むことができ、繁殖も可能です。妊娠して2カ月程度で子どもが産まれ、年に数回の繁殖があります。

猫の基本的な生態を理解することは、適切な飼育につながります。猫の行動は、生まれつき要因、生後の学習による要因、生殖状態を含んだ生理的要因によって様々変わりますが、基本的には猫が暮らしやすい環境にするために室内飼育、繁殖制限、所有者明示という3つの提案があります。屋外に出ることは、事故、怪我、感染症の面からも猫にとって高い危険があります。室内で高さを含めた空間の提供や、積極的に遊び

の時間を作ることも大事です。繁殖を制限することは、殺処分を減らすため、また問題行動の低減にも有効です。また、引越越し、外出、災害に備える意味でも所有者の明示は重要です。さらに、猫のストレスを発散するため、あるいは通院や災害時などの対策のためにも猫のトレーニングも考えて頂きたいと思えます。

猫の行動には、それをやりたいという本能的・生理的欲求と、やれば良いことがあると学習している場合があります。猫の行動を変えたい時に、やりたい気持ちを抑えずに、ただ行動を止めるだけではストレスが溜まってしまいうでしょう。出来ないように阻止する、あるいは他の行動をするように仕向けるという事は大切です。これは、ノラ猫対策を考えるためにも必要です。猫にも個体差がありますから、その都度考えていくことができれば、外に暮らす猫ともうまく共同生活が送れると思えます。

ウサギの繁殖生理と愛護

●林 典子氏
ハロー動物病院院長
エキソチックペット研究会副会長



ウサギはウサギ目に分類され、昔は重歯目といわれていました。現在は歯目として飼育されているウサギは100%がアナウサギで、穴を掘って生活するのが特徴です。種類によって大きさに差はありますが、体中の構造は同じです。ウサギを一言で表現すると、小型

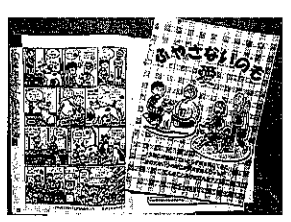
の草食性で、肉食獣に食べられる立場にある動物種であるため、多くの子孫を残すよう非常に旺盛な繁殖力が備わっています。この繁殖力はホルモンの影響によるもので、主にオスは精巣、メスは卵巣から分泌される。そして、メスは性成熟に達すると首の下に肉垂ができます。

ホルモンの影響が出てくるとしつけがしにくくなり、人間と一緒に生活をする中で問題が起きることがあります。オスは縄張り意識が強いのでスプレー行動をしたり、急に足に噛みついてくる場合があります。メスは本能的にお腹の赤ちゃんを守るうとするため、触らせず、人に馴れません。このような問題行動が増えると、人とのコミュニケーションが取れにくくなり、どうしても世話が不十分になってしまいます。ホルモンの影響が出る前から、抱っこなどのコミュニケーションをとる練習を行うことは、とても大切です。

環境省発行資料紹介

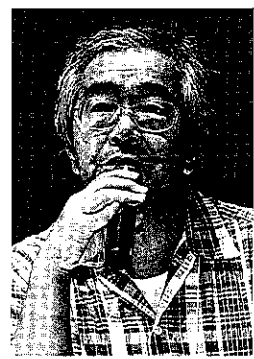
ウサギのケージを半分薄暗くすると、穴と同じような環境になるので、ウサギは安心して過ごすことができます。完全草食動物なので、食事は乾草などの繊維が豊富なものが不可欠です。ウサギには涼しくて湿度が低い環境が適しているため、室温管理も行わなければなりません。動物種の特性を十分に把握して、私たちが可能な範囲でこれらの条件を整える努力をする事が、ウサギたちに対する思いやりではないかと思えます。(まとめ/宮野多恵・大竹里美)

今年度も動物愛護週間中央行事に合わせて、環境省より「ふやさいのも愛」というパンフレットが発行されました。このパンフレットでは、繁殖制限を行わずに犬や猫を飼育していること、どのような問題が起これば、さらにその問題がなぜ起こってしまうのかなどの解説が、分かりやすいイラストと共に紹介されています。また、自治体での犬や猫の引取りと殺処分分、現状や、学校で飼育されているウサギの現状、不妊去勢手術の利点と欠点等、様々な情報が詰まっています。このパンフレットは環境省のホームページからダウンロードできますので、是非ご利用下さい。



地域猫対策について

●高木 優治氏
新宿区保健所衛生課管理係勤務



新宿区保健所の地域猫対策についてお話をします。まず猫に関する3つの「なぜ」についてご説明したいと思います。1つ目は「なぜ町の中に猫がいるのか」。猫はネズミの被害を防ぐために飼育されたのが

始まりでした。犬のように紐で繋いでいる、ネズミを取ってくれないので、外に自由に出していたという経過があるのです。2つ目に「なぜ人間は猫の管理をしなければならぬのか」。家畜でもある愛護動物は、人が品種改良して、生まれてから死ぬまで人が管理する生きもののはずです。猫だけが自由に町中をウロウロして、あちこちでトラブルを起こしているため、その解決策として考えられたのが地域猫対策です。3つ目、「なぜ自治体が地域猫に取り組まなければならないか」。保健所では、一方で猫の被害に苦情のある人、もう一方で猫の保護をしてほしいという人、180度違う双方の意見を受けます。そこで、地域猫対策を考える必要がありました。

従来は、猫に関する苦情・相談・要望・批判等の受付、解決を新宿区保健所が行っていましたが、東京都

が平成13年から15年の3年間実施した、「飼い主のいない猫との共生モデルプラン事業」で、新宿区には合計4ヶ所のモデルプラン地域が誕生しました。その後、東京都の事業が一旦縮小した後も、問題を抱えている保健所は止めるわけにはいきませんので、平成16年より事業名を「人と猫との調和のとれたまちづくり」とし、去勢不妊手術費の助成については、飼い猫用とノラ猫用の費用に違いを出すなど強化しています。平成19年には、それまで地域ごとであったグループを横断的に組織する、「新宿区人と猫との調和のとれたまちづくり連絡協議会(事務局は新宿区保健所)」を立ち上げ、地域の問題解決を連絡協議会(協働組織)が他の地域・区民に働きかけ、自主・自立の解決するよう目指しています。

新宿区の地域猫対策ですが、個人・ボランティアによる対策から近隣区ボランティア団体との対策まで、8つの対策パターンで進んでいます。区としての地域猫対策ガイドラインは持っていますが、ノラ猫の被害を町の中でなくすために、①頭数をきちんと制限してコントロールする ②どこで餌をあげているか、誰があげているかを明らかにして定点定時の餌やりをする ③餌や糞の片付けをする といった事を掲げています。

飼い主のいない猫問題は、猫を巡る人間関係のトラブルであり、地域コミュニティの再生や、地域環境保全の課題、暮らしやすいまちづくりの視点を併せ持つことで解決するものです。新宿区では、地域猫対策を行政・地域住民・ボランティアの協働事業として、お互いの時間と知恵と労力を出し合い、地域の問題を地域で解決する仕組みづくりを課題として対応しています。